

女性学部長のニコロ・波小大 波小大は、京都府精華大・文学部教授の竹富博子さんが次学部長選ばれた。江口文化研究で著書も多い田中優子さんも、法政大社会学部長から次期総長に選任された。ほかに国際基督教の学長は日比谷朝子さん、東洋大学

学長は村松孝子さん。水田宗子さんは城西大の理事長だが、水田家が設立した城西大の長の座におのずか就いたのである。

女性学長への期待

教育は女性の得意分野だ。公立の小中高校には、くも女性校長がいるのだから、大学にもその波が及んでゆかろう。筆者は京

都精華大にマン文学部があることを初めて知ったが、なるほどそういう時代なのだから、そのうちタレント学部、アイドル学部などが出現するかもしれない。

現するかもしれない。マジメな話、幼児や子ども教育には女性の力が圧倒的だ。とすると二十歳前後のフロンティア世代

の指導、教育にも女性の力をもっと活用しなければならぬかとも思える。こころした流れを単純に肯定するわけではないが、明治・大正をかりかえつても、教育界の大物に野見花露、津田梅子、下田歌子、大妻コトカがいたのだから、これからも心算のしつかりした女性学長がはらうほどに出現し、活躍してほしいものだ。(新やわらか術)

# 葛藤越え大暴れ宣言

平松 礼二 さん (日本画家)



## モネの聖地で展覧会

フランス・ジヴェルニーといえは、印象派の巨匠クロード・モネ(一八四〇—一九二六年)が愛した場所。今も、世界中から訪れるファンが後を絶たない。日本画家平松礼二さん(モネは今夏、聖地ともいえるその街のジヴェルニー印象派美術館で展覧会を開いた。

蓮の池・モネへのオマージュニは、同館の新記録となる七万四千人の来場者を集めた。しかも、展覧会後、出品した二十五点はすべて同館のコレクションに加わり、これから海外各地を巡回する予定だ。

晩秋、鶴岡八幡宮に程近い神奈川県鎌倉市の一角。自宅を訪ねると、四十歳近くある広いアトリエで、脳目も振らず制作に没頭する平松礼二の姿があった。声は明るく、力がみなぎる。「心によんでいたものを、いっぺんに購らすことができた」

七月十三日から十月末まで開かれた特別展「平松礼二画」

### 文化

「平松礼二画」は日本人特有の

### 土曜の訪問

美術に詳しい認識で発表の機会は稀薄で少ない。自身も「狭さを感じていた」

白鳥はすくと王典ではな。今年もまた、平松が表す「現代美術」として日本画を描き解けてきた。展覧会に臨むにあたり「現代日本画が世界に通じる特性を持つ」とを平松は強調した。

そして、それは、かならずある。特別展を終え、フランスだけでナベルキー、スペインでも展覧会入り始めた。「一番分かりますし手応え。現代の日本画を見て見たいとかないうばかりだったが、伝わったと確信を持って」と喜びをかみしめる。

琳派のような華やかさな装飾性、巧緻な筆遣いによる独特の表現で知られる。代わっての人氣日本画家の一人。が、若い頃は、油絵を志願するあまり、苦しんだ。父の転勤で東京から移り住んだ名古屋の旭丘高美術科時代、「戦後の西洋画教育の多残。巨大な画面を作ったり、厚塗りをしてたり、ペインティングナイフを使ったたり。油絵に對抗して、自負のない表現を目指す日々でした」

一九九四年、バリのオアシンジュリア美術塾で、モネの「睡蓮」のシリーズに出会う。「楕円形の部屋を飾る絵は、まるで絵巻物のよう。また、折り目をつければ屏風になると思った。パースペクティブ(遠近)もない近景。初めて見た日本画的な西洋画に驚いてしまった」と振り返る。

なぜ印象派の画家は日本美術を採り入れたのか、そ

のエネルギーの源にあの何が、「自分では描かないと分からない」。以来十五年にわたる日仏を行き来し、モネやヴァン・ゴッ、シャガール、ルヴルらが取材地風景各日本調材を表す印象派・ジャポニスム・シリーズを手掛けた。

求め続けを待たず近年、見え始めた。「昔懐には、日本人の感覚の鋭さ、手の込めた技術力、にじみない色彩の美しさがある」。例えは、と羨むのは、自然との関係の深さだ。

「西洋画と違って、自然は証服すべき存在。しかし、われわれに比べて、山川草木雪月花はみんな友達。油絵はおてんばさまが描かないが、日本画は本懐を描けば雨も曇りも雪も、曇らなくていい。幼いころから五感を研ぎ澄まし、自然をみていていかにと分析する。」

展覧会のための展覧の後、に描いた、巨大な大曲線の屏風「モネの池々の雲映る」。ある日、現地の空を赤に染めた。池に映る「雲」(雲はたなく、スナックと霧が下りるまじに晴らな)。まるで歌舞伎を見るかのようにドラマチック。この夕景を描かなくとも、欲望はほらこぼれた。「モネもさあ描いたはずだ」と、分厚い作品目録を調べた。しかし、ない。

日本人の感性を、あらためて体感した瞬間だった。

今回、「ジャポニー」の声に、装飾性、遊心、マニスマに代表される、当たり前の日本画が最も強く実感した。「西洋画には、これまで憶えなかった、遊心、(このまま突き進めたいんだ)」と叫ぶ。

「今までは模写ばかりがなかった。かつて先輩たちが琳派をこつこつと盗んで、それを大暴れした。ちゃめめ、おたがっけに顔をほらせた。(冒険まで)

美術に詳しい認識で発表の機会は稀薄で少ない。自身も「狭さを感じていた」

白鳥はすくと王典ではな。今年もまた、平松が表す「現代美術」として日本画を描き解けてきた。展覧会に臨むにあたり「現代日本画が世界に通じる特性を持つ」とを平松は強調した。

そして、それは、かならずある。特別展を終え、フランスだけでナベルキー、スペインでも展覧会入り始めた。「一番分かりますし手応え。現代の日本画を見て見たいとかないうばかりだったが、伝わったと確信を持って」と喜びをかみしめる。

琳派のような華やかさな装飾性、巧緻な筆遣いによる独特の表現で知られる。代わっての人氣日本画家の一人。が、若い頃は、油絵を志願するあまり、苦しんだ。父の転勤で東京から移り住んだ名古屋の旭丘高美術科時代、「戦後の西洋画教育の多残。巨大な画面を作ったり、厚塗りをしてたり、ペインティングナイフを使ったたり。油絵に對抗して、自負のない表現を目指す日々でした」

一九九四年、バリのオアシンジュリア美術塾で、モネの「睡蓮」のシリーズに出会う。「楕円形の部屋を飾る絵は、まるで絵巻物のよう。また、折り目をつければ屏風になると思った。パースペクティブ(遠近)もない近景。初めて見た日本画的な西洋画に驚いてしまった」と振り返る。

なぜ印象派の画家は日本美術を採り入れたのか、そ